

本物と贋物

〔聖書〕 エレミヤ書 28章 1～11節

その同じ年、ユダの王ゼデキヤの治世の初め、第四年の五月に、主の神殿において、ギブオン出身の預言者、アズルの子ハナンヤが、祭司とすべての民の前でわたしに言った。「イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。わたしはバビロンの王の軛を打ち砕く。二年のうちに、わたしはバビロンの王ネブカドネツアルがこの場所から奪って行った主の神殿の祭具をすべてこの場所に持ち帰らせる。また、バビロンへ連行されたユダの王、ヨヤキムの子エコンヤおよびバビロンへ行ったユダの捕囚の民をすべて、わたしはこの場所へ連れ帰る、と主は言われる。なぜなら、わたしがバビロンの王の軛を打ち砕くからである。」そこで、預言者エレミヤは主の神殿に立っていた祭司たちとすべての民の前で、預言者ハナンヤに言った。預言者エレミヤは言った。「アーメン、どうか主がそのとおりにしてくださるように。どうか主があなたの預言の言葉を実現し、主の神殿の祭具と捕囚の民すべてをバビロンからこの場所に戻してくださるように。だが、わたしがあなたと民すべての耳に告げるこの言葉をよく聞け。あなたやわたしに先立つ昔の預言者たちは、多くの国、強大な王国に対して、戦争や災害や疫病を預言した。平和を預言する者は、その言葉が成就するとき初めて、まことに主が遣わされた預言者であることが分かる。」すると預言者ハナンヤは、預言者エレミヤの首から軛をはずして打ち砕いた。そして、ハナンヤは民すべての前で言った。「主はこう言われる。わたしはこのように、二年のうちに、あらゆる国々の首にはめられているバビロンの王ネブカドネツアルの軛を打ち砕く。」そこで、預言者エレミヤは立ち去った。

〔序〕 預言者を立てて

私たちは神さまを、選挙カーから手を振る候補者を見たり、握手したり、スピーカーから流れる演説を聞くようには、確認できません。しかし聖書は「神さまご自身が私たちに言葉をもって語りかけて、ご自分を明らかに示して下さい」という信仰に固く立っています。

神さまはモーセにこう約束なさいました。「わたしは彼らのために同胞の中から、あなたのような預言者を立てて、その口にわたしの言葉を授ける。彼がわたしの命じることを、すべて告げるであろう」（申命記 18:18）。

こうして神さまは、預言者を次々とお立てになり、彼らを通して御心を明らかに示して下さいになりました。ですから旧約聖書には、多くの預言者の言葉が記されています。そしてその言葉が歴史の出来事としてどのように具体的に現わされたかを、記しています。

神さまは最後に、イエス・キリストによって御心を完全に決定的に現わして下さいました。イエス・キリストは、言葉や業だけでなく、その生き様と死に様のすべて、すなわち全存在をもって、神さまの言葉を明らかに語って下さいました。このイエス・キリストによって語って下さっている、神の愛と救いの言葉に応答して生きていく信仰が、私たちの信仰です。

先日私は航空券を電話で予約購入しました。空港で本人であることを証明するものを提示して、航空券をもらうようにと言われました。「私は本当に本人なのだ」との証明が必要なのです。預言者にしても、神さまが本当にその人を立てたのかどうか、どこで分かるのでしょうか。

エレミヤは南王朝ユダがバビロン帝国に滅ぼされる激動の時代に、紀元前626年頃から約50年にわたって預言活動をしました。神さまは「あなたが生まれる前から諸国民、諸王国の預言者として決めていたのだよ」とおっしゃって、青年エレミヤを預言者にお召しなりました。しかし彼は任命書なるものをいただいでいません。預言者として本物か贋物かの区別が、今日の主題です。

[1] 歴史から正しく学ぶ大切さ

エレミヤ書の26章をご覧ください。ヨヤキム王の治世の初めに、彼はエルサレムの神殿の庭で、主に命じられた言葉を語りました。するとエレミヤはたちどころに逮捕され、裁判にかけられました。その理由は「この神殿がシロのようになり、この都は荒れ果てて住む者もなくなる」と主の名によって預言したからです。

シロはカナンの地に定住したイスラエル共同体が、神の幕屋を据え、後に神の宮を建てた地です。その神の宮で少年サムエルが大祭司エリに育てられました。しかし後にペリシテ軍によってシロの神の宮は破壊され、神の箱は奪われました。BC1050年頃のことです。

ダビデ王の時代になって神の箱はエルサレムに戻り、息子のソロモン王が豪壮な神殿を建てて、その聖所に安置されました。BC958年のことです。そしてエレミヤの時代まで約360年間、神殿はその威容を誇ってきたのでした。

その間に北王朝はBC722年にアッシリア帝国によって滅ぼされました。そしてBC688年アッシリアの大軍が攻めてきてエルサレムは包囲されました。ヒゼキヤ王は預言者イザヤに祈りの助けを要請すると共に、自分自身も粗布をまとって神殿に入り懸命に祈りました。すると突如18万5千の大軍が混乱に陥り、アッシリア王は引き揚げていきました。小さな南王国が奇跡的に救われたのです。

そこで人々は「この神殿がある限り自分たちの国は大丈夫だ、神の民は護られる」という思いを強く持つようになりました。その神殿の庭でエレミヤが「わたしはこの神殿をシロのようにし、この都を地上のすべての国々の呪いの的とする」と主の名による預言をしたのでした。ヒゼキヤ王時代の奇跡から100年程後のことです。人々が激しく怒ったのは当然でしょう。

しかしこの時南王国には、まだ公正な判決を下す裁判官と、それを支持する人々がいました。そして「エレミヤには死に当たる罪はない。彼は我々の神、主の名によって語ったのだ」という判決を下したのでした(26:16)。その理由は「あの奇跡的にエルサレムが護られた時代にも、預言者ミカが、今日のエレミヤと同じ預言をした。しかしヒゼキヤ王は、ミカを殺さなかった。かえってミカの預言を聞き入れて主なる神に恵みと憐れみを祈り求めた。もしもエレミヤを偽預言者だとして殺せば、神の裁きを我が身にもたらすことになる」というものでした。

こうしてエレミヤの預言は本物と判定されました。裁判官が、時流や人心に惑わされず、過去の歴史から正しく学んだからです。しかし裁判がどれも真実に行なわれるものではありません。26章の終りには、エレミヤと全く同じ預言をしていながら、預言者ウリヤは殺されたと記されています。

命をかけて真実を語る本物、歴史に学ぶことによって本物と贋物とを見分けることの出来た少数者。26章は今日の私たちに、とても大切なことを教えてくれています。

[2] ハナンヤとの対決

次はエレミヤ書28章、ハナンヤとの対決です。これは26章から10年以上も後のことです。この10年の間にヨヤキム王からその子のヨヤキンに代わりして3ヶ月後、王以下貴族たちがバビロンに捕えられて連れて行かれました。第一次捕囚(BC597年)です。そして南王朝最後の王ゼデキヤの代になっていました。

預言者ハナンヤが神殿で語りました。「イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。わたしはバビロンの王の轆を打ち砕く」(28:2)。そして2年のうちに捕囚となってバビロンに連れて行かれた前の王ヨヤキン(エコンヤ)以下のすべてを帰還させるというのです。人々は喜びに沸き立ったことでしょう。

しかしエレミヤは直ちに反論しました。「アーメン、そうだったらどんなによいことだろう。だが違う。主はこうおっしゃっておられる」「わたしがあなたと民すべての耳に告げるこの言葉をよく聞け。あなたやわたしに先立つ昔の預言者たちは、多くの国、強大な王国に対して、戦争や災害や疫病を預言した。平和を預言する者は、その言葉が成就するとき初めて、まことに主が遣わされた預言者であることが分かる」(28:7～9)。

その時エレミヤは主のご命令で、木の轆を作って自分の首にはめ、それに綱をつける格好をしていました。エレミヤの反論にハナンヤは感情が激したのでしょうか。エレミヤの首から轆をはずし、力一杯に打ち砕いて人々に言いました。「主はこう言われる。わたしはこのように、二年のうちにあらゆる国々の首にはめられているバビロンの王ネブカドネツアルの轆を打ち砕く」。エレミヤは何も言わず沈黙したまま、その場を立ち去りました。

首に木の轆をつけたおかしい格好のエレミヤと、その頑丈な轆を手で打ち砕いて見せたハナンヤ。ハナンヤの方が力強くいかにも頼もしい本物の預言者のように人々の目に映ったのではないのでしょうか。しかし主は言葉なく引き下がって来たエレミヤに、再び言葉をお与えになりました。そこでエレミヤはもう一度ハナンヤと対決したのです。そして最後にこう言いました。

「ハナンヤよ、よく聞け。主はお前を遣わされていない。お前はこの民を安心させようとしているが、それは偽りだ。それゆえ、主はこう言われる。『わたしはお前を地の面から追い払う』と。お前は今年のうち死ぬ。主に逆らって語ったからだ。」(28:15～16)。預言者ハナンヤは、2ヶ月もしないうちに、死んでしまいました。

昔神さまがモーセに「預言者を立てて、その口にわたしの言葉を授ける」とお約束なさった時に「わたしの命じてないことをわたしの名で勝手に語る預言者は死なねばならない」(申命記 18:20)とおっしゃいました。そのお言葉通りになったのでした。

神の名で自分勝手に語ることは死に値する重い罪だと言われています。恐ろしいことです。その意味か

らいて、神さまの名によって語るということは、命懸けのことなのですね。ハナンヤも預言者の自覚を持っていました。その責任の重大さは、よく承知していたはずですが、それがどこでどう誤ってこのような厳しい裁きを招く結果になってしまったのでしょうか。

[3] 国を滅ぼす贖物

ハナンヤとエレミヤの対決はゼデキヤ王の治世第4年の5月とあります。この年にゼデキヤはバビロンに赴いて忠誠を誓っています(51:59)。しかしこの年から5年後の治世第9年10月には、エルサレムがバビロン軍に包囲され、1年半後の治世第11年5月に落城し、王国は滅亡してしまいました(BC587年)。このように王国が滅びようとしている時のことでした。王国が滅びるとは異常な大事件です。国が内側で深く病んでいたからに他なりません。

日本も無謀な日中戦争の泥沼に陥り、戦線をアジア・太平洋全域に拡大して、64年前の1945年8月15日に日本の歴史始まって以来の敗戦という悲劇を味わいました。去る8月9日の夜TVのNHKスペシャルで、最近発見された海軍作戦中枢士官たちの戦後の反省会資料テープから集めた証言が放映されました。その証言では米国相手に戦争しても勝てないという意見が出てきません。敵が態勢を整える前に叩きつぶせという作戦に専念するばかりのようでした。また開戦反対を言おうものなら、陸軍が反乱を起こすと言われていたそうです。軍部内の強大化を目指す主導権争いが印象的でした。

海外諸国を見聞する機会の多い海軍士官たちが、どうして米国と日本の国力の違いを正しく判断出来なかったのでしょうか。私は戦後30年、米国へ行った時、太平洋上を航空機で10時間以上も飛行して西海岸に着き、それから6時間飛んでもまだ東海岸に着かない米国の遠さと広さに驚きました。どうしてこのような国と戦争して勝てると思ったのか、軍人たちの愚かさにあきれました。日中戦争が次第に不利になったのも、中国大陸の広大さからだったのですから。

無条件降伏した1945年だけみても、3月10日夜の東京大空襲で下町は焼け野原となり、一夜にして10万人の市民が死にました。6月沖縄地上戦では市民を含む25万人が死にました。8月6日には原爆一発で45万の広島市が廃墟になりました。そして9日には二発目の原爆降下が長崎に。

それでも陸軍は勝つ戦力を保有していると主張して、降伏に強硬に反対しました。そして8月15日に陸軍大臣は切腹自殺、宮城を護る近衛兵が師団長を軍刀で斬り殺しています。私たち国民も神風が吹いて最後には勝つと信じ込んでいたのです。まさに正常な判断が出来ない狂気が人々の心を支配して、国が滅びるのです。国を護るべき軍隊が国を滅ぼしました。贖物が国も我が身も滅ぼすのです。

エレミヤは神さまの言葉をこう語っています。「身分の低い者から高い者に至るまで、皆利をむさぼり、預言者から祭司に至るまで、皆欺く。彼らはわが民の破滅を手軽に治療して、平和がないのに、『平和、平和』と言う」(6:13~14)。手軽に手当てをして、平和ではないのに平和、平和というのは、利をむさぼる心の仕業だということです。ハナンヤはどのようにして手軽な平和を預言したのでしょうか。

預言者としてエレミヤにライバル意識を燃やしたからなののでしょうか。彼と別の言葉で自分の存在を誇示したかったからか。人々の喜び求める言葉で、人気や称賛を得ようとしたかったからなののでしょうか。

王国がまさに滅びようとしている時です。耳に快い言葉を聞く時ではないはずです。神の裁きの言葉を聞いて悔い改め、神の憐れみをいただいて再生すべき時のはずです。その時に、人に取り入って語ろうとすることが、預言者にとって利をむさぼることだと、エレミヤは言ったのでした。彼は自分の内にもある利をむさぼろうとする心と、生涯必死に戦い続け、神さまからのみ言葉のみに集中して語ろうとしたのでしょう。

[結] 悔い改めることの難しさ

平和がないのに平和・平和という偽りの預言者を生んだのは、手軽な治療を求める聞き手の責任でもあります。このままでは滅んでしまうぞと、自分の病んでいる姿を直視させる厳しい言葉を嫌い、甘い言葉を求める大衆の責任でもあるのです。神さまは私たちに決して迎合なさいません。滅びの道から取り戻し、命を与えるために、私たちを打ち砕き、悔い改めて立ち直らせようとなさいます。厳しい裁きの言葉をこそ求めて聞く勇気が必要です。

ヨヤキム王の世にエレミヤが神殿崩壊の預言した時に、100年前のヒゼキヤ王時代の歴史に学んで、エレミヤを本物と正しく判断した26章の裁判の記事も、大切な教訓を与えてくれます。神の言葉は歴史の出来事として具体的に現われます。語られた 神の言葉を歴史の出来事に見出していく信仰の大切を痛感します。

神さまは、預言者を通して御心を明らかに示して下さいました。旧約聖書は、多くの預言者の言葉と、その言葉が歴史の出来事としてどのように具体的に現わされてきたかを記しています。最後に神さまは、イエス・キリストによって御心を完全に決定的に現わして下さいました。その証言が新約聖書です。

ですから今日の私たちは、旧新約聖書全巻を通して神さまが私たち一人ひとりに語りかけて下さる言葉を聞いていく信仰に立っています。皆さん、聖書によって神の言葉を聞き取り、聖書によって神の言葉を語って下さい。語られる神の言葉が本物か贋物かも、聖書のよって判断していきます。私の説教も、聖書によって贋物か本物かを吟味なさって下さい。

神の名で安易な平和を語ったハナンヤが急死しました。どうしてゼデキヤ王も祭司たちも人々も、エレミヤの預言を本物を認めなかったのでしょうか。アッシリヤの大軍に包囲された時、ヒゼキヤ王は王衣を裂き、粗布を巻いて神殿にこもり、悔い改めの祈りを捧げたように、ゼデキヤもどうして悔い改めなかったのでしょうか。

29章をご覧ください。人々は依然として安易な平和の言葉を求め続け、エレミヤの厳しい預言を嫌っています。そして遂に滅亡を迎えてしまいました。これほど私たちは、悔い改めることが、出来ない者なのですね。甘い言葉が好きなのですね。だからこそ神さまの厳しい言葉を聞き続けなければならないのではないのでしょうか。

イエスさまは、「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」とお命じになっています。それは、すべての人が福音を必要としているからです。悔い改めえる者に命と喜びと希望を与える神の言葉・福音を語っていきましょう。人の好む言葉ではなくて、神さまの本物の言葉を語って参りましょう。